

# 日本語の場所格交替における全体効果と 動詞の語彙的意味\*

杉浦滋子

キーワード：日本語 場所格交替 自動詞 他動詞 複合動詞

## 要旨

日本語で場所格交替をする自動詞は「場所全体が影響を受ける」という意味をもつものに限られるが、これは場所主語をもつ自動詞一般に対する制約に従ったものである。それに対し、日本語で場所格交替をする他動詞には場所が目的語となった場合に全体効果を見せるものと「目的語となった場所全体が影響を受ける」という語彙的意味をもつものがある。自動詞、他動詞どちらも複合動詞の後項要素が「場所全体が影響を受ける」意味を加える例が見られる。

## 1. 場所格交替

場所格交替では同じ動詞を用いながら、一方で場所を表す副詞句の要素として現れる要素が他方で主語あるいは目的語として現れ、合わせて前者で主語あるいは目的語として現れる要素が後方で主語・目的語以外の格表示で現れる。様々な言語で指摘されているが、よく知られる英語で例示する。(1)は自動詞の場所格交替の例で、(1a)で主語として現れる要素 *bees* が(1b)では *with* 前置詞句の要素として現れ、(1a)で *in* 前置詞句の要素として現れる場所 *the garden* が(1b)では主語となっている。(2)は他動詞の場所格交替の例で、(2a)で目的語として現れる要素 *paint* が(2b)では *with* 前置詞句の要素として、(2a)で *on* 前置詞句の要素として現れる場所 *the wall* が(2b)では目的語となっている。(1a)の主語、(2a)の目的語は場所に対して存在物と呼ばれる。(1a)と(1b)、(2a)と(2b)の文はそれぞれ意味が非常に近いが、場所を表す要素が自動詞の主語として現れる(1b)、他動詞の目的語として現れる(2b)では(1a)(2a)と違い、訳に示したように場所全体に関わる意味が表される。これを全体効果と呼ぶ。

(1) a. *Bees swarmed in the garden.* (蜂が庭で群れていた)

---

\* 本稿は日本言語学会第 159 大会 (2019 年 11 月 16-17 日) での発表「日本語の『場所格交替』の全体効果はどのように生じるか」に加筆修正したものである。コメントをいただいた皆様には心から御礼を申し上げる。

- b. The garden swarmed with bees. (庭いっぱいには蜂が群れていた)
- (2) a. They sprayed paint on the wall. (彼らはペンキを壁にスプレーした)
- b. They sprayed the wall with paint. (彼らは壁全体にペンキをスプレーした)

異なる格フレームで現れる動詞を異なる動詞と考えずに「交替」もしくは「代換」という用語で呼ぶのは、二つの文の意味の違いが多く動詞に同じようにみられるため、その意味の違いを個々の動詞の意味ではなく格フレーム（構文）の違いにあると考えるからである。<sup>1</sup> 加えて、swarm のような自動詞が生物を主語にとること、spray のような他動詞が液体を目的語にとことは明白なので(1b)(2b)のような使われ方を動詞の通常の意味的な派生として説明するのは難しい。

日本語でも次のように同じ動詞を用いながら場所が「に」によって格表示される場合と自動詞の主語あるいは他動詞の目的語として現れる交替が見られる。

- (3) a. 駅に帰宅困難者があふれていた。  
b. 駅が帰宅困難者であふれていた。
- (4) a. 壁にペンキを塗った。  
b. 壁をペンキで塗った。

ただし、日本語の場合(4b)には(4a)にない全体効果が認められるものの、(3a)(3b)はどちらも場所全体に存在物が存在していて(3b)にのみ全体効果が見られるということはない。次節以降、自動詞と他動詞に分けて日本語を考察する。

## 2. 日本語自動詞における場所格交替

### 2.1 自動詞単純動詞

英語で場所格交替をする自動詞は意味から以下のように分類されている(Levin 1993)。最初の 6 グループは意味的に場所主語をとることは予想されない。それぞれ光、音、物質などのあり方を表す動詞であるからである。最後の swarm 動詞のグループにおいても abound (「豊富に存在する」) は意味の上から場所を主語にとることも予想されるが、それ以外のものは生物の動きを表す動詞であり、意味からは場所主語をとることは予想されない。

- (5) 光の発生を表す動詞: beam, glow, sparkle など  
音の発生を表す動詞: buzz, hiss, shriek など  
物質の噴出を表す動詞: drip, foam, ooze など

<sup>1</sup> 意味の違いを格フレームが異なることで説明するなら、場所主語構文にのみ現れる接置詞が独自の意味をもつとは考えないことになる。

音の存在を表す動詞:echo, resound, reverberate など  
個体特有の存在の仕方を表す動詞:bloom, blossom, sprout など  
動きに関わる存在の仕方を表す動詞:dance, quiver, tremble など  
swarm 動詞:abound, bustle, crawl, creep, hop, run, swarm, swim, teem, throng

日本語の場所格交替は英語に比べて生産性が低いことが指摘されており、自動詞で場所格交替を示すものとして次のものが挙げられている（森川 2018）。

- (6) 光る、輝く、満ちる、一杯になる／である<sup>2</sup>、あふれる、つかえる、詰まる、渋滞する、散らかる、にじむ

この中で「光る」「輝く」「にじむ」は場所格交替動詞ではない。「光る」「輝く」では(7)のような文が場所格交替の例とされるが、これは光が反射を起こすような場所では(7b)のような文が可能だけで、そうでない場所では(8b)のように場所格交替は見られない。「にじむ」では(9a-b)のような文が場所格交替の例として示されるが、「にじむ」には「液体が表面にしみ出てくる」という意味と「輪郭がぼやける」という意味があり、(9a)は前者の意味で(10a)と同様に考えるべきもの、(9b)は後者の意味で「目」を「視界」のメタファーとして用いており、(10b)と同様に考えるべきものである。前者の意味でも後者の意味でも一方の要素は液体だが、もうひとつの要素は前者の意味では液体がしみ出てくる場所、後者の意味ではぼやけるものであり、明確に異なる。(10c)で見るように、前者の意味では(9b)の格フレームは非文となる。

- (7) a. 星が湖面に {光っていた／輝いていた}。  
b. 湖面が星で輝いていた。  
(8) a. The sky shone with stars. (空いっぱい星が輝いていた)  
b. ×空は星で {光っていた／輝いていた}。  
(9) a. 目に涙がにじんだ。  
b. 目が涙でにじんだ。  
(10) a. 額に汗がにじんだ。  
b. 夜景が涙でにじんだ。

---

<sup>2</sup> 「いっぱいである」は明らかに動詞ではないので本稿では考察の対象としないが、動詞以外での場所格交替も興味深い現象である。ただし(ia)に比べて(ib)は省略文のように感じられる。

- (i) a. クローゼットが服でいっぱいだ。  
b. クローゼットに服がいっぱいだ。

- c. ×額が汗でにじんだ。

共起する副詞にも次のように違いがみられる。

- (11) a. 額に汗がうっすらにじんだ。  
 b. 目に涙がうっすらにじんだ。  
 (12) a. ×夜景がうっすら涙でにじんだ。  
 b. ?目がうっすら涙でにじんだ。

これらを除くと日本語自動詞で場所格交替を示すものは「あふれる」などの「場所に存在物がいっぱいになる」意味のもの、「つかえる」「詰まる」「渋滞する」などの「何かが通る場所（通路）が存在物の存在によって通路として使えなくなる」意味のもの、そして「ちらかる」である。前二者は明らかに場所全体に影響があるという意味をもつ。しかし、「ちらかる」はどうだろうか。(13a)にくらべて(13b)の方が部屋全体が影響を受けていると受け取れる。<sup>3</sup>

- (13) a. 書き損じの原稿が部屋にちらかっていた。  
 b. 部屋が書き損じの原稿でちらかっていた。

だとすると日本語自動詞にも全体効果を見せるものがあるということになるが、(14a, b)を比べると他動詞「塗る」では場所が目的語でない場合全体効果がないことがはっきりしているが「ちらかる」ではそうではない。

- (14) a. 壁にペンキを塗ったが、壁全体を塗ったわけではない。  
 b. ?書き損じの原稿が部屋にちらかっていたが、部屋全体がちらかっていたわけではない。

全体効果を見せる格フレームと見せない格フレームがはっきりしている「塗る」と異なり、(13a)と(13b)の間には程度の差はあるものの(13a)でも部屋が全体として影響を受けている。つまり「ちらかる」も語彙的に場所全体が影響を受けるという意味を表している。

このように、日本語の自動詞が場所主語をとる場合には動詞の語彙的意味に「場所全体が影響を受ける」という意味が含まれる。そこで本稿では次の制約を提案する。

<sup>3</sup>伊藤たかね氏にご指摘いただいた。ご指摘に感謝もうしあげる。

(15)日本語自動詞では場所が主語となりうるのは動詞の語彙的意味に場所全体に影響があることが含まれる場合に限られる。

また、場所格交替を考察するにあたっては動詞の複数の意味に注意する必要がある。「あふれる」は液体を主語とするのが原義だが、(16a-b)で見るとその原義では存在物が主語となる(16a)、場所が主語となる(16b)のどちらの格フレームでも現れない。第三の格フレームでは場所が「から」表示されて現れ、場所が主語となることも可能だがその場合存在物は現れることができない。

- (16) a. ×グラスにワインがあふれていた。  
b. ×グラスがワインであふれていた。
- (17) a. グラスからワインがあふれた。  
b. グラスがあふれた。  
c. ×グラスがワインであふれた。

これは存在物が液体か否かという違いだけではない。液体ではない派生的な意味であっても(18a)で見ると(17a)の格フレームで現れる。そして、(17a)(18a)の「あふれる」が(i)「ある場所に存在物が多すぎて場所の外に出る」という意味であるのに対し、(18b)の「あふれる」は(ii)「ある場所に存在物が多く存在する」という意味である。前者の意味の場合「場所」は<容器>だが、後者の場合は異なる特徴づけが適当のように思われる。なぜなら<容器>であれば当然<容器>外の空間も想定される(<容器>から出たり入ったりが想定される)が、(ii)ではそれが無いからである。そこで、(ii)の「場所」を<場>と呼ぶこととする。場所格交替をするのは<場>を必須要素とする「あふれる」(ii)のみである。

- (18) a. 会場から人があふれた。  
b. 会場に人があふれている。

「不満が漏れる」「後輩が不満を漏らす」など原義が液体に関わる語が感情の表現に用いられることもよく見られ、「感情は液体である」「人間は容器である」というメタファーで説明される(Johnson and Lakoff 1980)。<sup>4</sup>メタファーによる拡張によって存在物が感情、場所が経験者や経験者の顔などという文が派生されるが、この場合日本語では「で」ではなく「に」によって格表示されて場所格交替を見せる。<sup>5</sup>

<sup>4</sup> 「人間は容器である」のようなメタファーでの使用とは区別するため、場所格交替構文の要素の特徴づけには<>を用い、<容器>のように表記する。

<sup>5</sup> 英語の場合には存在物が心理であっても場所主語構文には同じ with が用いられる。

- (19) a. ?彼の顔は喜びであふれていた。  
 b. 彼の顔は喜びにあふれていた。  
 c. 彼の顔には喜びがあふれていた。

また、関連する次のような例では場所格交替はなく、(19b)の格フレームのみとなる。「才気」のように感情ではない抽象物にも用いられ、意味としては「抽象物が人・物・場所に認識可能な形で顕著に存在する」ことである。<sup>6</sup>

- (20) a. 彼女は才気にあふれている。  
 b. ×彼女には才気があふれている。

それぞれの意味がどの格フレームで現れるかは次のようにまとめられる。場所格交替があるのは(ii)(iii)の意味のみである。

- (21) (i)格フレーム：<容器>から<具体物>があふれる  
 (ii)格フレーム a：<場>に<具体物>があふれる；格フレーム b：<場>が<具体物>であふれる  
 (iii)格フレーム a：<人・人の表情>に<感情>があふれる；格フレーム b：<人・人の表情>が<感情>にあふれる  
 (iv)格フレーム：<物・人・場所>が<認識可能な抽象物>にあふれる<sup>7</sup>

同じように「つまる」にも(i)「何かの通路がふさがる」という意味と(ii)「場所いっばいに物が存在する」という意味がある。そして場所格交替をするのは(i)の意味のみである。

- (i) a. Excitement danced in his eyes. (興奮が彼の目の中できらめいていた)  
 b. His eyes danced with excitement. (彼の目は興奮できらきらしていた)

<sup>6</sup> なお、「満ちる」は「あふれる」と同じようにもともと存在物が液体であるのが原義だが、現代語で存在物が液体である場合の容認性は低い。存在物が感情に拡張された場合には「で」ではなく「に」で格表示される。

- (i) ×グラスはワインで満ちていた。  
 (ii) a. 彼の表情には希望が満ちていた。  
 b. ×彼の表情は希望で満ちていた。  
 c. 彼の表情は希望に満ちていた。

<sup>7</sup> 「あふれる」(iv)はさらに格助詞を伴わない名詞修飾の形式への派生を見せる。

- (i) a. 個性あふれるメンバー  
 b. 野趣あふれる湯治場

- (22) a. 樋に落ち葉がつまった。  
b. 樋が落ち葉でつまった。
- (23) a. スーツケースに三日分の衣類がつまっている。  
b. ×スーツケースが三日分の衣類でつまっている。
- (24) (i)格フレーム a:<通路>に<具体物>がつまる；格フレーム b:<通路>がつまる  
(ii)格フレーム:<容器>に<具体物>がつまる

(22)と(23)の違いを捉えるには、「つまる」(i)の「場所」が<通路>であり、「つまる」(ii)の「場所」が<容器>であることを記述する必要がある。

注1で述べたように意味の違いを格フレームのみで説明するなら「に」「で」には独自の意味はないことになる。たしかに(3b)などは「手段」と説明できる(25a)、(19b)などは「原因」と説明できる(25b)と類似しているように見受けられる。しかし(25)の「で」「に」で表示されるのは任意の要素であるのに対し場所格交替構文では必須要素であり、さらに「で」「に」は場所、日時などにも用いられるので、ここで扱う構文に現れる「で」「に」が格表示する要素に「手段」「原因」といった意味付けをする必然性はない。とすると「で」によって格表示されるか「に」によって格表示されるかに意味的な制約が存在する場合には述語または格フレームの制約である。しかし、同じ動詞でも(24)(i)の具体物について用いられる場合と(24)(ii)の人間に認識できる形で存在する抽象物について用いられる場合で違う助詞が用いられるので動詞の制約ではなく格フレームの制約である。

- (25) a. 彼女は新聞紙で隙間を塞いだ。  
b. 彼の顔は期待に紅潮していた。

## 2.2 自動詞複合動詞

Fukui et al. (1985)では「-つくす」の複合によって場所目的語をとらない動詞から場所目的語をとる複合動詞が作られることが指摘されている。

- (26) a. 壁にポスターを貼る  
b. ×壁をポスターで貼る  
c. 壁をポスターで貼りつくす

「-かえる」も次のように自動詞と複合する要素で、「極限まで」という意味をもつと考えられる(杉村 2009)。

- (27) a. 私たちはあきれた。  
 b. 私たちはあきれかえった。
- (28) a. 叱られてしょげている。  
 b. 叱られてしょげかえっている。

「-かえる」は「あふれる(ii)」とも複合して「あふれかえる」という複合動詞を作る。「あふれかえる」では「あふれる」(ii)と同様場所格交替が見られる。

- (29) a. 駅に帰宅困難者があふれかえっていた。  
 b. 駅が帰宅困難者であふれかえっていた。

しかし、「静まる」と「静まりかえる」では、(30)(31)で見ると「静まる」は場所主語をとらないが「静まりかえる」は場所主語をとる。(31b)は「教会」がメトニミーとして「教会の中の人々」を指す場合もありうるが、「教会」が無人で純粹に場所である場合にも成立する。

- (30) a. 観客は静まった。  
 b. 観客は静まりかえった。
- (31) a. ×教会は静まっていた。  
 b. 教会は静まりかえっていた。<sup>8</sup>

また、「むせる」の主語は人間のみだが、「むせかえる」は(32b)のように場所主語を選択する。これらについては「-かえる」のもつ「極限まで」という意味が場所に適用されて全体に影響が及ぶという意味となると考えると(15)の制約によって説明できる。なお、「静まりかえる」は一項動詞で、(32c)で見ると「むせかえる」は場所格交替をしないので、(15)は場所格交替をする自動詞だけではなく一般的に自動詞についての制約となる。

- (32) a. ×会場はファンの熱気でむせていた。  
 b. 会場はファンの熱気でむせかえっていた。  
 c. ×会場にファンの熱気がむせかえっていた。

---

<sup>8</sup> 「教会」が「教会の中の人々」を指す場合には(i)のように「-ている」を伴わなくともよいが、純粹な場所が主語である場合には「-ている」を伴う。  
 (i) 教会は一瞬にして静まりかえった。



### 3. 他動詞

他動詞の考察に入る前に先行研究にも指摘があるとおり文法性の判断に揺れがあることを指摘しておく。例えば Iwata (2008)では「判断は常に明確ではない」との但し書きのもと(33a,b)が文法的とされ、Fukui et al.(1985)では(33c)が文法的とされているが、いずれも筆者の直感とは異なる。自動詞でも判断の揺れはあるが、他動詞の方がその揺れは大きいように思われる。<sup>9</sup> この揺れの大きさの理由について後で考察する。

- (33) a. 箱をイチゴで詰める  
b. 皿をごはんで盛り付ける  
c. 舗道を水で撒きつくす

#### 3.1 他動詞単純動詞

「塗る」「飾る」「刺す」などが日本語で場所格交替をする他動詞として挙げられる。「塗る」は場所格交替をすることを見たが、すべての場合で交替するわけではなく(34)(35)のような文脈では交替は難しくなる。

- (34) a. パンにバターを塗った。  
b. ×パンをバターで塗った。  
(35) a. 肌に日焼け止めを塗った。  
b. ×肌を日焼け止めで塗った。

しかし、次のような場合には許容度が上がる。これは副詞句によって「全体が影響を受ける」という要素が加わるためと考えられる。

- (36) a. パンを端から端までバターで塗った。  
b. 肌をくまなく日焼け止めで塗った。

つまり「塗る」では場所が目的語になることができるのは場所全体が影響を受ける場合である。「壁／ペンキ」と「パン／バター」「肌／日焼け止め」では違いがあり、前者では文脈の支えがなくとも場所が目的語となりうるが後者では文脈の支えが必要となる。<sup>10</sup> このように文脈による違いはあるものの「塗る」では場所の一部のみに存在物が存在する場合と全体に存在する場合が区別できる。

「飾る」でも場所目的語構文(37b)は存在物目的語構文(37a)と異なり、場所全体が影

---

<sup>9</sup> 定延(1980)にも同じ観察がある。

<sup>10</sup> 全体効果とは語彙的に表されていないのに全体に影響があると解釈されることなので、(36)については全体効果があるとは言わない。

響を受けているという解釈になる。ただし、「塗る」と違い、場所目的語構文(37b)は、部屋の一部に花が存在するだけでも成立する。例えば部屋の中のテーブルに花瓶を置いただけでもよく、(38a)に比べ(38b)は容認度が落ちる。「飾る」の場所目的語構文は自動詞「ちらかる」と同じように、場所の一部に存在物が存在することが場所全体に影響を与えることになる。

- (37) a. 部屋に花を飾った。  
 b. 部屋を花で飾った。  
 (38) a. 部屋に花を飾ったが部屋は変わり映えしなかった。  
 b. ?部屋を花で飾ったが部屋は変わり映えしなかった。

さらに (39)(40)で見ると、存在物目的語構文と違い、場所目的語構文では一時的でない状態や平面に取り付けるもの以外にも用いることができる。

- (39) a. ?鏡の周りにステンドグラスを飾った。  
 b. 鏡の周りをステンドグラスで飾った。  
 (40) a. ?ロビーに豪華なシャンデリアを飾った。  
 b. ロビーを豪華なシャンデリアで飾った。

このように「塗る」「飾る」では場所目的語構文は全体に影響がある点で存在物目的語構文と違っているが、「刺す」のような動詞ではこれは見られない。(41a,b)を比較した場合(41b)の方がより全体的に影響を受けるとは解釈されない。

- (41) a. 人形に針を刺した。  
 b. 人形を針で刺した。

同じ事態を(41a)のように表現しても(41b)のように表現しても意味の違いはそれほど大きくはない。しかし他の文脈を見てみよう。「針山／針」「肩／鍼」の(42)(43)では場所格交替がない。

- (42) a. 針山に針を刺した。  
 b. ×針山を針で刺した。  
 (43) a. 鍼灸師が肩に鍼を刺した。  
 b. ×鍼灸師が肩を鍼で刺した。

これらのパターンを説明するのは動詞と場所および存在物の意味的關係である。「針山

／針」の場合は刺す行為は通常針を片付ける行為である。その意味で「針山」は動詞と意味の上で一体化していて、事態の参与者として取り上げられるようなものではない。それに対し「肩／鍼」の場合は刺す行為は肩を治療する行為で、「鍼」が動詞と意味の上での一体化があり、事態の参与者として取り上げられるようなものではない。「針山／針」のように場所と動詞に意味の一体化があっても「肩／鍼」のように存在物と動詞に意味の一体化があっても場所格交替は起こらない。つまり日本語の他動詞で場所格交替が起こるのは存在物と場所がどちらも動詞と意味上の一体化がなく独立している場合である。交替では言わば二つの名詞句が入れ替わるのだから、この二つのどちらにも移動の自由度が必須なのは当然と言えよう。

動詞と存在物／場所が意味の上で一体化しているかどうかは当然文脈によって違う。「パンにバターを塗る」ことと「パンに辛子を塗る」ことは具体的な行為としては非常に似通っていても明らかに前者の方が見慣れた行為で存在物と動詞の意味上の一体化が起こりやすく、場所目的語構文も容認しやすい。<sup>11</sup> もうひとつの例として「ご飯茶碗を山盛りにする」ことと「ボウルを山盛りにする」ことは似た形状の場所に関する行為だが、文化的に前者の方が定着しているため場所目的語構文が容認しやすい。また、その場面特有の事情も影響を与える。箱の中にイチゴを存在させるのは通常運搬の際にイチゴが傷まないことが目的だが、そうではなく箱の中に何かを存在させるのが目的であれば(33a)も容認される。話者によって判断が違うのは動詞と存在物／場所の意味の一体化を感じるかどうか話者によって違うためと思われる。だからこそ自動詞より他動詞に判断の違いが多く見られるのであろう。

上述のように(41a,b)に大きな意味の違いは感じられないが、「を」格で表示される名詞の優位性は明確にある。例えば(44a)で数が多いのは「を」格で表示される「針」であり、(44b)で数が多いのはやはり「を」格で表示される「人形」である。<sup>12</sup>

- (44) a. 人形にたくさん針を刺した。  
b. 人形をたくさん針で刺した。

### 3.2 他動詞複合動詞

Fukui et al.(1985)は場所格交替が起こる条件のひとつに動詞が[+Affect]という要素をもつこととし、(26)で見たように「-つくす」の複合によって場所目的語が可能となるのは前項動詞が[+Affect]をもたないが「-つくす」がもつためと説明する。[+Affect]は動詞の必須要素が影響を受けることを表す。しかし「調べつくす」「探しつくす」「知りつくす」などで何かの影響を受けているということはないのでこの説明は意味的に

<sup>11</sup> 英語で「バターを塗る」ことは *butter* という単一形態素の動詞で表現されるが、「辛子を塗る」ことはそのようには表現されない。

<sup>12</sup> (44a, b)には「針で刺す行為を何回もした」という解釈もある。

不十分である。そこで本稿では「-つくす」に「極限まで」という意味があり、それが場所に適用されると「全体に影響を与える」ことになると主張する。そのため「貼る」のように単純動詞としては場所目的語を選択しない動詞と複合して場所目的語を選択する複合動詞を形成する。「-つめる」も同じで、(45)(46)のように「極限まで」という意味をもつ。そして(48)で見ると「敷く」は場所目的語をとることはないが、「-つめる」を後項要素にもつ「敷きつめる」は場所目的語を選択することが可能となる(Kishimoto 2001)。

- (45) a. 道場に通った。  
b. 道場に通いつめた。
- (46) a. トップの座に登った。  
b. トップの座に登りつめた。
- (47) a. 床にタイルを敷いた。  
b. 床にタイルを敷きつめた。
- (48) a. ×タイルで床を敷いた。  
b. タイルで床を敷きつめた。

Kishimoto (2001) は「-つめる」をアスペクチュアルな意味をもつ補文をとる要素、つまり影山(1993)の統語的複合動詞とする。確かに「極限まで」という意味は完了と意味の類似がある。しかし、(49a)と(49b)を比較するとわかるように、「-つめる」は「多くの小さい存在物が場所全体に分布する」という意味を加える。これは(5)の英語の *swarm* 動詞に共通に見られる意味である。「-つめる」は「完了」のようなアスペクチュアルの意味ではなく、かなり限定された意味をもっている。

- (49) a. 床に大きなじゅうたんを敷きつめた。  
b. ×大きなじゅうたんで床を敷きつめた。

なお、場所格交替をする単純動詞を前項動詞、「-つくす」を後項要素とする複合動詞では存在物が「を」格表示される場合には存在物の「極限」を表す。つまり(50a)なら「ペンキがなくなるまで」、(50b)なら「壁全体が塗られるまで」という意味になる。場所目的語をもつ(50b)では全体効果が強調されている。全体に影響が及ぶことを表す副詞でも同様で、「すっかり」で修飾される場合(51a)では「ペンキがなくなるまで」という意味で、(51b)では全体効果が強調される(永田 2005)。「敷きつめる」は(47b)のように場所が「に」格表示されても(48b)のように「を」格表示されても「場所全体に影響を受ける」という意味であるのに対し、後項要素が「-つくす」である複合動詞では影響を受けるのは「を」格表示される要素となる。

- (50) a. ペンキを壁に塗りつくした。  
b. ペンキで壁を塗りつくした。  
(51) a. 壁にペンキをすっかり塗った。  
b. 壁をペンキですっかり塗った。

#### 4. 結語

本稿では日本語の場所格交替を自動詞と他動詞に分けて考察した。自動詞で場所格交替を示すものは動詞の語彙的意味に全体に影響があることが含まれる。さらに「極限まで」という意味をもつ複合動詞の後項要素「-かえる」と複合することで場所を主語とする自動詞があることから、日本語には(15)の制約があると主張した。他動詞で場所格交替するものには「塗る」のように場所目的語構文で全体効果を見せるものと、「刺す」のように見せないものがある。後者の動詞では部分に影響を与えることが全体に影響を与えると解釈される。ただし場所格交替が見られるのは述語と存在物／場所が意味の上で独立している場合のみで、存在物／場所と述語が意味的に一体化している場合には場所格交替は起こらない。また「極限まで」という意味をもつ後項要素「-つめる」「-つくす」と複合することで場所目的語をとる他動詞がある。「-つめる」を後項要素とする「敷きつめる」では場所全体が影響を受ける解釈のみであるのに対し、「-つくす」を後項要素とする「塗りつくす」では「を」格表示される要素がその解釈を受けるとい違いが見られる。

本稿では(15)の制約を提案したが、森川(2018)は英語が衛星枠づけ言語であるのに対し日本語が動詞枠づけ言語であることで自動詞の場所格交替の違いを説明する(Talmy 2000)。英語は衛星枠づけ言語であり、様態のような付随事態が移動動詞に融合され、(52a)のように語彙的に移動を表す要素がなくとも移動（ある地点への、この場合は the cave への到達）を表す。スペイン語は動詞枠づけ言語であり、移動は動詞で表現され、様態は分詞として現れる。日本語も動詞枠づけ言語であり、「漂う」のみでは移動を表さない。

- (52) a. The bottle floated into the cave.  
b. La botella entró a la cueva flotando.  
the bottle MOVED-in to the cave floating  
c. びんは洞穴の中へ {×漂った/ok 漂って行った}。

森川は英語自動詞で場所格交替をするものは存在の様態を示す自動詞が場所主語をもつ静的動詞に融合したもので、衛星枠づけ言語ではこの融合が可能だが動詞枠づけ言語である日本語ではそれが可能ではないことから日英の自動詞の違いを説明する。

しかし、この分析のもとでは「-かえる」を後項要素とする複合動詞が場所主語をもつことについては別の説明が必要となる。また他動詞において「極限まで」という意味の後項要素をもつ複合動詞が場所目的語をとることも説明できない。

本稿では(15)の制約が日本語にあることを主張した。しかし、視点を変えてみると英語には「あふれる」や「つまる」「ちらかる」のような動詞が存在しない。aboundは豊富に存在することを意味するが、(53a)のような恒常的な状態のみを表し、(3)のような一回性の事態を表現するには(53b)のように形容詞 full を用いる。そして(54)で見るように日本語で場所あるいは存在物を主語とする「つまる」「ちらかる」で表す事態は英語では存在物のみを主語とする動詞で表し、場所格交替は見られない。

- (53) a. This river abounds in trout. (この川はマスが豊富だ)  
 b. The station was full of travelers. (駅は旅行者でいっぱいだった)
- (54) a. Leaves blocked the drain. (葉が樋につまった)  
 b. Broken glass littered the streets. (壊れたガラスが道にちらかっていた)

言語間のこの違いについては今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 伊東朱美(2015) 「日本語の移動変化動詞と場所格交替」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 (Bulletin of Japanese Language Center for International Students) 41:95 -105
- 影山太郎(1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 定延利之(1990) 「移動を表す日本語動詞述語文の格形表示と名詞句指示物間の動静関係」 『言語研究』 498:46-65
- 杉村泰(2009) 「コーパスを利用した複合動詞『一返る』の意味分析」 『言語文化研究叢書』 8:77-91 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科)
- 永田由香(2005) 「構文文法に基づく日本語他動詞分の分析 一壁塗り交替を事例に一」 『京都大学言語科学論集』 11:35-58
- 森川文弘(2018) 「自動詞場所格交替に生じる動詞の日英比較」 『姫路獨協大学外国語学部紀要』 31:53-66
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago University Press.
- Iwata, Seizi (2008) *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*. John Benjamins.
- Kishimoto, Hideki (2001) “Locative alternation and verb compounding in Japanese.” *Proceedings of 7th Mediterranean Morphology Meeting*.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago University Press.

- Levin, Beth (1993) *English verb classes and alternations – A preliminary investigation*.  
University of Chicago Press.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and cognition – The acquisition of argument structure*. MIT  
Press.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics. Volume II: Typology and Process in  
Concept Structuring*. MIT Press